

たいせつな時間は、写真の中で生きている。

この写真、たしか離婚してまもない三十八歳くらいのときに撮ったんだと思うけど、僕のどん底時代のものなんですよ。

どん底というのは、家庭生活の面でもそうだったし、仕事という面でもそう。三十歳から十数年間、僕は仕事に行き詰まっていたんです。作曲がいやでいやでしようがなかった。日本人である僕がなぜ西洋の音楽をやっているのかという疑問、クラシックの作曲家たるもの現代音楽に挑まねばならぬという常識への疑問、こうした疑問にどうしても答が出せず、苦しんでいたのね。だからこの写真も、ほら、暗い顔してるでしょう(笑)。仕事をこなしてはいるけど、少しも楽しんでいない顔です。

でも、四十五歳で自分のやるべきことがわかった。人に何と言われようと、難解な現代音楽ではなく、自分が心地よいと感じる、美しいメロディとハーモニーの曲をつくらう、と心に決めたら、とたんに人生が明るくなった。ふっきれたんですね。それ以後は、どんなに忙しくたってずっと幸せな毎日です。人間って、自分のやりたいうことが決まったら、それだけで明るく生きていけるんです。

僕は過去を振り返らない人間だけど、写真そのものは好きですよ。

ただ、ふだんは写真を見返している暇はなかなかないんだな。それでも、時にこうやって昔の写真を取り出してみると、この苦しんだ時代があったからこそ今があるんだな、とあらためて思い起こさせられますね。(談)

三枝成彰

明るい人生をつかむ前の「大いなるどん底」



1980年春、録音スタジオでの三枝さん。テレビの「鉄腕アトム」、あるいはロック・ミサ「ラジエーション・ミサ」のレコーディングをしたときのものである。後者はロックと現代音楽を融合させた作品で、81年、レコード・アカデミー賞を受賞した。というと傍目には順調そうだが、実は三枝さんにとっては、あれこれ思い悩んでいた時代だったという。



p r o f i l e

● Shigeaki Saegusa

1942年生まれ。作曲家。東京音楽大学教授。9歳から作曲を始め、東京芸術大学作曲科を首席で卒業。同大在学中に安宅賞受賞。以後、芸術祭優秀賞など受賞多数。現代音楽のほか、映画やテレビドラマの音楽も多数手がける。テレビの司会や執筆でも活躍中。代表作はオラトリオ「ヤマトタケル」、オペラ「千の記憶の物語」「忠臣蔵」「Jr.バタフライ」など。